

「クアラルンプール日本人学校」における特別支援教育の実践

前クアラルンプール日本人学校 教諭

群馬県立盲学校 教諭 塚越 晶子

キーワード：特別支援学級，特別支援コーディネーター，待機児童生徒

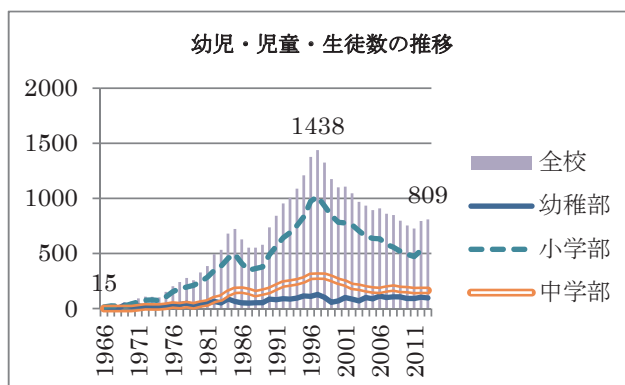
1. はじめに

クアラルンプールと聞いてどれくらいの人がマレーシアの首都として、地図が頭に浮かぶのだろうか。シンガポールは、マレーシアの一部が独立した場所と言った方がわかりやすいだろうか。赴任前は私もそんなイメージだったが、住んでみるとアジアの大都市として多種多様な人種が住んでおり、東京以上にグローバルな都市だと言うことがわかった。クアラルンプール（Kuala Lumpur：以下KL）日本人学校は幼児児童生徒数が800人を超える比較的大きな学校である（以下に生徒数の推移を示す）。敷地面積も世界の日本人学校の中で第二位を誇る広さで、中学部のグラウンドはソフトボールコートが4面とれる広さであった。

2. KL 日本人学校 幼児・児童・生徒数

(1) 幼児・児童・生徒数の推移

KL 日本人学校は、1966年に小学生15名で開校した。右記に示すように、1997年の1400名以上をピークに2011年には半数700名が底となり、2012年から再び増加に転じ、2013年は800名を越えるという経過をたどっている。KLで特別支援学級の教員をしていたと話すと、多くの人は「えっ、特別支援があるのですか？」という反応を示す。KL 日本人学校は、各学年、幼稚部は1～2クラス、小学部は3学級、中学校は2学級となっている。



アジア近隣で調べてみると、シンガポールやバンコクといった大都市の日本人学校には、特別支援学級がある場合が多い。

(2) 特別支援学級 児童生徒数の推移

KL 日本人学校で特別支援学級がいつから始まったか、残念ながらきちんとした資料が残っていない。そのため、自分がわかる範囲で遡るしかない状況であるが、10年前には、〇〇学級という担任名での特別支援学級があったようである。8年程前に現在と同じ「なかよし学級」という名称になったと思われる。平成17年度～19年度は、2名担任制で児童が5～6名であった。そのうち1名は、赴任者の子どもであったと聞いた。前任者のH20年度～21年度の間、児童生徒数が6名から3名に減り、担当も1名になった。H23年度に自分が赴任し、帰国者と新任者のすれ違いの引き継ぎになったのは初めてであった。児童生徒数は、3名から1名または、2名となった。H26年度4月の段階では、2名の在籍となっている。

3. 特別支援学級「なかよし学級」の状況

(1) 赴任3年間の特別支援学級の様子

先に述べたように、H23年度に赴任したときには、3名の在籍であった（中学部2名、小学部1名）。3名の状

況について、赴任前に特別に校長の許可を得てメールで情報交換を行った。私は特別支援学校教諭の資格は持っているが、病弱養護学校と盲学校という経験で、一般校の特別支援学級を担当した経験はない。そういうなかで、日本へ帰る者と行く者が顔を合わせることなく特別支援学級の児童生徒の引き継ぎをするという難しい面があった。赴任前後に多くのメール交換や電話をすることで、なんとか軌道に乗ることができた。

①H23年度（1年目）

在籍の3名は、中度知的障害2名、自閉症スペクトラム1名という内訳で、実技教科や学活・行事等は協力学級、他はなかよし学級で授業を組むという体制であった。しかし、在籍はしていないが個別の配慮が必要な小5の1名が、半分近くの学習をなかよし学級で受けており、協力学級での理科や社会の授業が大変になっていて、失禁や円形脱毛という形で身体症状として表れていた。その児童の授業について何度も支援会議を持った。他に3名の児童が、通級という形で1～2時間個別の指導を行っていた。H23年1学期に、自閉症スペクトラムの1名は、日本へ本帰国となり、在籍は2名。小学部5年1名、中学部3年1名。中学部3年は、日本の特別支援高等学校の選抜入試を受け、第2希望の学校へ合格し、本帰国となった。

②H24年度（2年目）

2年目から特別支援コーディネーターも兼務することとなった。特別支援学級担任とコーディネーターが別だと相談できる良い面もあるが、コーディネーターは特別支援の免許も経験もなく、相談することが難しかったため、時数を考慮してもらえれば兼任することも可能ではないかと自分から校長に提案した。

在籍は、小学6年1名となったが、先に述べたもう1名の在籍していない児童の件で、保護者も含めた支援会議を何度も行った。結果、12月にはその児童を特別支援学級在籍に承諾してもらうことができた。中学では本帰国が決まっていたため、在籍させることが必要だと考えた（その児童は、卒業後予定通り帰国し、中学校特別支援学級在籍となったが、結局保護者の強い希望でふつうクラスの授業を多く受けることになってしまったそうである）。通級の児童は5～6名となり、個別の授業では対応できなくなったことやソーシャルスキルトレーニングが必要なこともあり、少人数の授業も始めた。2学期途中からは、これ以上入級者が増えると、今の指導の厚みを維持することが難しくなるという判断から、入級がwaiting（待機）となった。学校のホームページに掲載したが、それを見ないうちに問い合わせが来たり、いきなり要支援の子どもが入学希望で来校したりということが起こった。

③H25年度（3年目）

3年目も特別支援コーディネーターを兼務することとなった。1学期の在籍は中学部1名となった。1名による弊害もあり保護者も心配していた。教師と生徒が1対1の時間が長いということはお互いにとって難しい面があるので、担任ではない人の授業もなるべく入れて対応した。この1名の生徒の保護者は仲間をもっと増やしてほしいと言っていたが、学校としては新入生の特別支援学級入級を認めておらず、海外での特別支援には日本以上に限界があることを感じた。2学期からかねてから入級を勧めていた小2男子が在籍することになり、在籍が2名となることでこの問題は大幅軽減された。



算数：キャップの数で位の学習

(2) 特別支援学級の授業体制

在籍している児童生徒の授業は、概ね、実技教科は協力学級と一緒に受け、その他の時間を特別支援学級の授業を組むという形を取っていた。毎週末、週案入りの学級便りを出していたので次に掲載する。

ある週の週案

中1 Aさん						小2 Bさん					
	月	火	水	木	金		月	火	水	木	金
	3日	4日	5日	6日	7日		3日	4日	5日	6日	7日
	1の2読書	1の2読書	1の2読書	学部朝会	1の2読書		2の3読書	学部朝会	2の3読書	2の3読書	2の3読書
1	自立 週末	パソコン	国語文作I	国語 文	国語文作I	1	自立週末	生活科	国語文作I	国語文作I	国語文作I
2	音楽	数学足し算	国・漢字	体育	英語活動	2	体育跳び箱	算数引き算	国・漢字	算数引き算	英語活動
3	数学足し算	自立 左右	自立 走る	家庭科	数学足し算	3	算数引き算	自立 左右	音楽	図工	算数引き算
4	水泳長距離	国語文作I	生活 SST	家庭科	なか美術	4	英語活動	音楽	生単 SST	図工	体いく
弁当	なかよし	1の2	1の2	1の2	1の2	弁当	なかよし	2の3	2の3	2の3	2の3
5	作業	生活単元	数学足し算	図書	美術	5	道とく	としょ	算数引き算	体いく	生活授業参観
6	体育		学活	道徳	総合	6	生活科			面談	学級懇談

グレーの網掛けは協力学級に行く授業で、その他が特別支援学級での授業。太枠は、通常の時間割から変更のあった授業となっている。中学生の方が、教科の関係で協力学級との授業は少なくなっている。本人、保護者とも協力学級との授業を多く希望していた。現状はここまでであった。美術は、支援者をつけて参加し、別に1時間個別の美術を行うことで対応していた。特別支援学級での授業では、AさんとBさん2名の国語、算数の学力は似通っていたので、2名一緒に行くことを基本として、1名が協力学級の授業で、1名しか残らない時には個別に行く時間もあった。小学生の方は、多方面にわたって保護者の要望も強く、なるべく協力学級での時間を増やした。学習面でも家で学年相当の学習を行い、本人の負担は大きかった。授業変更や行事の場合、その都度協力学級担任と相談して、本児にとってあるいは学級にとって、または教員側にとってベターなラインを探しつつ決める必要があり、相談が欠かせなかった。

また、自分の赴任当時は、特別支援学級の児童生徒は、朝も休み時間もお弁当の時間も放課後も基本は特別支援学級で過ごし、そこから協力学級の実技の授業に行くという体制であった。あまりにも少人数で過ごしすぎる弊害もあると考え、保護者の要望もあり、協力学級で過ごす時間を増やした。朝は、協力学級に登校し、自由時間を過ごす。お弁当も週に1回は支援学級で食べ、他は協力学級で食べる。放課後は、1時間くらいバス下校までの時間があつたが、基本は協力学級で過ごすように変更した。級友の対応も変化し、仲間として認められることが多くなり、お互いにとってよい交流になったと考えている。

4. 特別支援コーディネーターの仕事

(1) 学校内の児童生徒の要支援の状況

毎年、5月頃に文科省から校内の要支援児童生徒と体制についての調査があり、特別支援コーディネーターになった年にそれをまとめると、担任が要支援だと考える児童生徒が予想より多いことがわかった。それまでは、担任による支援しか行っていなかったが、現状の人員の中でできる体制を検討することになった。

また、在籍の児童生徒の大半は駐在員の子どもなので両親が日本人の場合多いが、1割程度はマレーシア人とのダブルの生徒で、今後も日本で生活する予定のない者もいた。日本の文化も学んでほしいという理由から学費も高い日本人学校を選んでしたが、母がマレーシア人の場合は、家庭での言語が日本語でない場合が多く学習に支障をきたすこともあった。日本語支援教室というのは、月に1、2時間程度、以前から実施されていたが、その支援だけでは学習について行けない児童も多いという現状があった。また、言語の問題だけではないと考えられる児童も、ダブルの子どもたちが学校全体の要支援児童生徒の大半を占めていた。

(2) 授業の支援体制

1年目1学期には、主に実技教科の中学部教員で、持ち授業時数が少なく余裕のある教員に特別支援学級の担当授業を割り振っていた。1年目2学期から、担任である自分が主要な国語や算数を持つよう校長から要請があった。その結果、中学部教員間の持ち時数に偏りが出る結果となっていた。そこで、特別支援コーディネーターとして、その持ち時数の偏りを是正する意味も含め、その余剰時数を特別支援学級以外の支援に当てるのはどうかと考えた。就学指導委員会や学部会議で提案し、2年目の2学期から実施することになった。

また、2年目の1学期からKL在住の日本人で大学講師、臨床心理士の資格を持った先生が学校にボランティアで相談に乗ってくださることになった。この先生には、虐待の疑いのある児童についての相談で、事務長が知人を紹介してくれたことが縁で連携できるようになった。発達障害に関わる相談や検査、カウンセリングをお願いできた。就学前検査も、この先生の助言によりKL日本人学校でも実施するようになった。

学校全体の支援の体制は、以下の4種類となる。①②は、以前からあったもので③④は新設したものである。学期ごとに担任や学年主任から要支援とされた児童生徒をコーディネーターが観察に行き、優先順位を決め、可能な時数の範囲内で、就学指導委員会で決定した。

- ① 特別支援学級への在籍
- ② 特別支援学級への通級（1～2時間程度）：授業者はコーディネーターである自分

主に発達障害のある児童を5名ほど集めて、特別支援学級在籍の2名と一緒に1時間ソーシャルスキルトレーニングをねらいとした授業を行った。また、個別に指導が必要だった児童には、1時間1対1で、カウンセリング的な時間を取った。保護者にも相談し了承された子どものみ実施した。

- ③ 教科の取り出し授業（主に算数1～4時間まで）：中学部の教員

学習は、算数の時間に教室以外の別室で行った。保護者とも相談した上で了承された児童のみで3年目には4名の児童がいた。

- ④ T2支援（主に国語や算数に2時間だけを基本、水泳に1時間等）：中学部の教員、コーディネーター

低学年は児童数も1学級30名から40名と多く、その中に支援を必要とする児童も複数名いたことから、保護者の了承を得てという形ではなく学級に支援に入るTTという形で行った。担任や学年主任から支援を要請された児童は約20名おり、約10学級に2～4時間T2が入っていた。



通級性SSTテント体験

(3) 転入生のWaitingへの対応（待機）

要支援を隠して転入するケースや、支援学級があるから大丈夫と思いき来馬してしまうケースもあった。派遣の先生の子供が転入できないというケースも生じ、支援は日本人学校だからといっても同じにはできないという課題があった。これらの本人と保護者と面談したり、支援会議を持つという仕事も大きな課題だった。

5. おわりに

日本では、特別支援コーディネーターの仕事はしたことがなかったにもかかわらず、海外という限られた環境の中でできる支援を考え、管理職や臨床心理士の先生と相談することは貴重な体験であった。また、KLでは、100名ほどの要支援児童を集めている一般の小学校特別支援学級や、優秀な生徒だけを集めている盲学校にも現地校視察に行くことができ、ところかわれど悩みは一緒であることや、マレーシアの方が進んでいる教育面をかいま見ることもできた。これら経験したことを今後活かす仕事ができたらと考えている。